

第30期社会教育委員の会議

第6回定例会

議事録

令和5年1月16日

【１】開催日時

令和５年１月１６日（月）１８時３０分～２０時３０分

【２】開催場所

教育会館３階 研修室「ぎんが」

【３】出席委員

井上委員（議長）、堀井委員（副議長）、峯岸委員、村上委員、村内委員、佐藤委員、
山崎委員

【４】出席職員

教育委員会事務局

佐々木社会教育係長、御園生社会教育担当係長、清野社会教育係主任

【５】傍聴人

無し

【６】次第

１ 第５回議事録の承認

２ 議事

（１）実践的連携・協働に向けた活動計画Ⅱ

３ その他

（１）次回日程について

○議長 ただいまから第6回の定例会を開催したいと思います。

では、本日の議事日程に沿って進めていきたいと思います。

まず、第5回議事録案の承認でございます。事務局より事前に送付されていますので、委員の皆様には御確認いただいておりますが、訂正等がありましたら、お申出いただきたいと思います。いかがでしょうか。

では、御承認いただきます。ありがとうございます。

では、この会議終了後、堀井委員と峯岸委員、署名をしていただきますようお願いいたします。あわせて、本日の議事録の署名については、いらしていないですが、奥平委員と村上委員にお願いしたいと思います。よろしくお願いします。

○議長 いつものように修正の有無にかかわらず、後日事務局より完成版が配付されるということでございます。

では、議事に移ります。今回も前回同様に、実践的連携・協働に向けた活動計画Ⅱ、来年度ですが、5月から6月にかけての学校とその団体との連携・協働活動の試行を考えながら、それに向けた計画を練っていこうということでございます。本日は、総合型地域スポーツクラブと船橋子どもぶんか村について前回と同じように3つの検討事項がありました。これらを中心に皆様と一緒に考えていきたいと思います。今回も全員で共有したいと思いますので、ホワイトボードに記入しながら進めたいと思っています。

それでは、総合型地域スポーツクラブから検討していきたいと思いますが、委員、いかがですか。

○委員 検討シート、資料5のシートでいいのでしょうか。

○議長 資料4です。資料4に基づいて総合型地域スポーツクラブ、大体時間は40分ぐらいということで、19時15分、20分あたりをめどに、まず委員より、総合型地域スポーツクラブの事例をお話しいただいて、その後に委員から船橋子どもぶんか村のお話をしていたきたいなと思っています。

では、お願いします。

○委員 前々回お話したように、このクラブも発足してから20年。10年記念誌と20年記念誌ということであるんですが、2022年、去年の6月でちょうど20年ということで、20年続いているということは、ある意味、私としては素晴らしいと思っています。

検討事項は3つあるんですけれども、より連携・協働するために何が必要かということなんです、御存じのように働き方改革云々、あるいはブラック企業ともやゆされている

学校教育の中では、小学校はもちろんそうだと思うんですけども、特に中学校では部活動をどうしていくかということが非常に大きな課題になっています。現実問題としては、現状では非常に難しいと言われています。

第1番目に指導者の問題。基本的には、今までは、教育の一環として教員が部活の顧問あるいは指導者としていたわけですけども、非常にオーバーワークであると。ただ、この部活動をなくすようなことになると教育活動から非常に大きな欠落が出てくるということで、やはり部活動は教育的な見地からもなくすわけにいかない。子どもたちも保護者も非常に大きく期待している面があるということで、どう維持発展させていくかというのが1つの大きな課題になっておるわけですけども、それを解決する1つのオプション、手段として総合型地域スポーツクラブがあるのではないかなと思っています。現実問題として、現状、部活動をどう連携しているかといいますと、具体的には卓球部の指導者が今1人います。もう一つは文化クラブなんですけれども、お琴のクラブがありまして、お琴のクラブに総合型地域スポーツクラブの関係者が指導に入っているのが現状で、それをどう進めていくかというのがこれからの大きな課題かと思います。

部活動ではないんですが、総合型地域スポーツクラブに空手道というクラブがありまして、空手の指導者が正規の武道の授業で空手を取り入れたということで、いわゆる正式な授業、教育課程の中の授業で教えている。これは部活動とは離れるのかもしれませんが、空手部はまだありませんので、そこで入っているということが、部活動ではないけれども、1つの連携になっているということで、より連携・協働するために何が必要かというのは、部活動とどうタイアップ、コラボしていくかということが今の大きな課題かなと思いますし、東深沢中学校だけではなくて、他の中学校も1つのオプションとして、総合型地域スポーツクラブを立ち上げることによって部活動の連携ができるという可能性があるのではないかと思います。

2点目は、障壁になっているものは何か。これは、はっきり言ってしまうと、今のところ障壁はないというふうには、言いたいんですが、なかなか言えないんですけども、もしあるとしたらば施設。いわゆるハード、学校の施設を使わせてもらっているんですけども、あくまでも学校の教育活動の邪魔にならない範囲内ということなので、全ては授業、学校行事等の合間を縫って使用しているということで、かなり制約があります。具体的に言いますと、まず、土日以外の日中は使えないということ。土日を使うことは使えるんですけども、あくまでも部活動優先であるということで、ただその部活動とどう調整

していくか。特に春、秋の大会とかが多いときには、そちらが優先されて、総合型地域スポーツクラブの活動がかなり制約されてくるという事実があります。現在のところは非常にウィン・ウィンの関係でやっていますので、特に大きな支障にはならないんですけれども、支障、障壁になるとしたら、施設の使用の問題かなと思います。

どんな連携・協働が考えられるかというのは、先ほども言ったように部活動との連携、学校行事との連携。現状でいいますと、部活動に指導者として入る、逆に部活動の生徒がスポーツ・文化クラブに、例えば野球部があった場合、現状子どもがなかなか集まらない、9人いないようなときに、ほかの学校との共同の大会というのものもあるんですけれども、なかなか9人集まらないで、部活動、練習がままならないときに、土日の野球のスポーツ・文化クラブで大人に交じってクラブ員として一緒に活動する。卓球も現在それがあります。クラブの卓球クラブに入って練習をやるということです。部活動ではちょっと満足できない生徒がクラブ員として入って、大人と一緒にやるようなことがあります。

これは多分いろいろなところがあると思うんですけれども、学校行事の中で、運動会の自転車整理とか、あるいは会場整理にスポーツ・文化クラブの部員がお手伝いに入ることもある。いわゆる学校行事との連携、そんなことが考えられるかなと思っています。この3年間、コロナ禍でなかなか思うようにできない部分もあるんですけれども、そんなことを現状ではやっているのではないかなと思います。

前々回にも出たんですけれども、なぜ20年も続いているかということの1つの大きな要素として組織化されているということが大きくフィーチャーされるのではないかなと思います。ただ、この組織化も長短があって、組織化されているゆえに硬直化して、この前出た緩い関係というのがなかなかできてこない。がっちりになってしまっていて、その中にはまってしまうようなところもなきにしもあらずかなと思います。

ただ、年会費を2000円から2500円取っているんですけれども、そういう会費を取りながら、保険とか、あるいは何かあったときにケアができるという安心感はあるかなと思っています。

取りあえずそんなところで、もし何かあったらお願いします。

○議長 今お話しいただいたことについて何か質問、あるいはお気づきのこと、いかがでしょうか。

○委員 指導員の方というのはどういう方なんですか。プロというか……。

○委員 例えばさっき出ましたお琴とか、そういう非常に専門的な技術が要る場合には多

少お金を払って外部から雇っていますけれども、ほとんど地域の……。例えばバレーボールなら、昔、バレーボールをやっていた得意な人とか、卓球もそうですけれども、クラブがあるうち謝金を払って来ていただいているのは4つか、5つぐらいだと思います。ほとんどは地域の方が教えているという状況です。

○委員 それは年間費の中からお支払いするんですか。

○委員 それは部ごとに。年会費はいわゆる保険とか、そういうことですので。あと部ごとに部費を取っていますので、そういうものからお支払いすることになっています。例えばテニスなんかは専門指導員を雇っているようですから、月3000円とか4000円取っている部もあるようです。

○議長 今のは東深沢スポーツ・文化クラブの話をされていたんですか。

○委員 そうです。

○議長 ほかに5つぐらいありますね。それも大体同じようなものとして理解してよろしいんですか。

○委員 はい。

○議長 ただ、今言われた例えば卓球部とかいう話については東深沢の場合。

○委員 部活をやっているところはほとんど少ないかな、これからの課題だと思います。

○議長 いや、委員が聞かれた指導者の話は、今お話しされたのは東深沢の例で話されたんでしょうけれども、ほかでも大体同じということですね。

○委員 ほかもそうだと思います。でも、できるだけ地域のことは地域の中でやろうというコンセプトですので、本当に専門的なエキスパートが必要なところ以外は、地域の指導者で賄うというのがコンセプトです。

○議長 それはどうやって見つけるんですか。

○委員 結局指導できる人がいるクラブができるということですよ。つまりバレーボールなら、バレーボールをやれる人、指導できる人がいるからバレーボールをやろうか、卓球なら卓球をやろうよということ。例えばテニスなんかのように指導者がいない場合には、どこからか探してきてやるということもある。合唱、お琴、テニス、新体操の4つが専門家を雇っているという形です。

○委員 もう一つ、先ほど問題、障壁といったところで、場所、ハードの問題という話があったんですけれども、どんなイメージなのかな。何が言いたいかというと、私は桜小出身なんですけれども、桜小は子どもたちのサッカーチームがあつて、野球チームがあつて、

バスケットがあって、子どもたちの団体が小学校の場所を毎回決めているんですよ。どの団体がいついつの何時から何時を使うみたいな、もう結構な取り合いで、需給逼迫している中、どこを優先するだったり、逆にそれを効率的にやろうというので融通し合うようなグループをつくって、そこで連絡を取り合うとか、結構ハードの問題は大きいと思うんですけれども、中学校だと、どうなんですか。部活が盛んであるか、ないかだったりとかという違いもあるし、そういう問題は具体的にはどんなイメージなんですか。

○委員 一般論から言えば、小学校、中学校もけやきネット。基本的には全部オープンに、平等に、パソコンか、あるいは何かで申し込んでというのが原則です。小学校は部活がないからあれなんですけど、中学校は部活がまず押さえる。その間隙を縫ってけやきに開いているということです。ところが、総合型地域スポーツクラブは、幸い区に登録しているスポーツクラブは、8割方、スポーツクラブで押さえられる。いいか、悪いかは別ですが、そういう特権が与えられるということがあります。ですから、その残った2割がけやきに……。でも、実情は、東深沢の場合、基本的にはほとんどスポーツクラブで取れているという状況のようです。でも、原則としては8割なんですね。2割はオープンにしなければいけない。だけれども、大体は部活でほとんど押さえられて、その間隙ですから、残っているものは少ない。

○委員 そうすると、枠はすごく小さくならないですか。部活が優先なわけですよ。

○委員 そうですね。先ほど出ました部活、部活でこうなっているところをスポーツクラブで使うことはなかなか難しいかもしれないですね。そういう実情があると思います。だから、その辺がちょっと難しいところです。ただ、東深沢スポーツ・文化クラブができた当初は部活とクラブで……。先生方も、部活をやりたいという先生もいますし、逆に余りやりたくないという先生もいますし、やりたいという先生とこういうものの多少のあつれきはあったようなことは聞いています。部活命という先生もいますし、逆に部活はやりたくないという先生もいますし、そういう実情、難しいところもありますけれども、何とかできて、今20年、こうなっているということは今のところいいのかな。

○委員 総合型地域スポーツクラブはどのくらいあるんですか。

○委員 世田谷区で認定されているのは8つかな。東深沢、用賀、尾山台、烏山、あとはどこだ……。

○委員 船橋。

○事務局 船橋、若林、城山。

○委員 もう一つありますね。たしか8つですよ。

○事務局 8つです。

○委員 これはみんな中学校がベースなんですか。

○委員 中学校がベースですね。今、中学校が学び舎になっていますので、中学校を中心にして学び舎で全部やっているというのも……。だから、東深沢も学び舎で東深沢小学校と等々力小学校の3つでやっているような形になっています。

○議長 先ほどもお話いただきましたが、今は世の中全体で、特に中学校のクラブ活動を社会へ移行しようという話が出ていますよね。平日の勤務時間、大体5時ぐらいまでは学校教育の中だけでも、それ以降ないしは、土日は学校教育外だから、地域のいろいろな仕組みを使ってもいいのではないかという声がある反面、中学校の校長先生からすると、いや、そこだけ変えようとしても動けない。特に運動部——文化部でもあっても、コンクールとかコンサートがあるところは、そちらのスケジュールが変わらない限りにおいてはなかなか難しいだろうというような声もある。でも、一方で、ヨーロッパなんかでは、サッカーとかスポーツは地域でやるみたいなのがあったりとか、いろいろな意見がありますが、委員から御覧になって、そういうクラブ活動の地域への移行の見通しなんていかがでしょうか。特に世田谷の場合には総合型地域スポーツクラブというのは、多分ほかの自治体よりはかなり先行しているし、今お話があったようにもう20年も続いているので、そういったベースがあるエリアとすることができるのではないかなと思うんですが、いかがでしょうか。

○委員 こういう時代なので、部活の地域移行というのはやっていかなければいけない問題だと思うんですけども、ただ、かなりバリアといいますか、かなり大きなハードルがあって、やっぱり指導者ですね。部活はどうしても昼間、日中ですので、土日は別にして、3時から大体5時、6時ですので、そこで指導者をどう見つけるかというのが一番の課題だと思うんですね。例えば土日なら指導できる、あるいは仕が事終わった後の7時、8時ならば指導できるけれどもというお勤めの方は結構いらっしゃるんですよ。だけれども、3時、5時、6時のところではなかなかですね。そうすると、どうしても大学生とか、高校生はどうかなと思いますけれども、その辺の人材をどう取り込んでいくかということがこれからは必要かなと思いますけれども、例えば日体大とか、3年生で終わって、4年生で、就活も忙しいんだろうけれども、東深沢なんかは近くに日体大がありますので、そういう4年生の暇なと言っては申し訳ないんだけれども、ちょっと手が空いた子どもたちを

指導者にということも当然開拓していかなければいけないときかなと思います。文科省もお金は出すと言っていますけれども、ただでやってもらうわけにいかないの、経済面をどうするかということですね。

もう一つは、これはあまり大きな声では言えないんですけども、先ほども言いましたけれども、部活命という教員もいるんですよ。部活の指導というのは、子どもたちとの間柄をつくるためのかなり大きな要素ですよ。結局、生活指導をする上で部活の指導というのは非常に大きなウエートを占めるんですね。そうではなくて、教員の本分は授業なんだという、二律背反ではないし、本当は2つ一緒なんですけれども、これとどう調整していくかという問題も実情としてはあるんですね。

もう一つは、子どもたちにとって部活がどう捉えられるのか。親ももちろんそうなんですけれども、部活の存在意義をどう捉えるかというのも大きな問題で、ある子ども、ある親は、こんなにやらなくても週1回ぐらいでいいんだという子どもや、逆に何で先生は指導してくれないんだ、もっとやってほしい、何で週1回ぐらいでは駄目なんだとか、毎日やらなければ駄目なんだという親、子どものせめぎ合いが結構あることも事実なんですね。だから、その辺をどう考えていくというのは、やっぱり部活というものに対する1つの大きな……。あとはどう地域で支える部活動にするかという、その辺の課題、難しい問題もあるかなと思います。かといって、やらないわけにいかないから、どこかで落としどころをつくっていかなければいけないんでしょう。

○議長 日本のある学校ないし先生の場合には、授業だけでなく、授業以外の子どもの姿がよく見える場所として部活を非常に大事にしてきましたからね。

○委員 そうですね。

○委員 多分皆さんもそうだと思うんですが、私みたいに教員を辞めてからも慕ってくれるのは大体部活ですよ。

○委員 学校が荒れた時代は生徒管理の手段として部活がいうところも多分あったと思うので、それで育ってきてしまうと、やはり部活は学校が担うべき、教員がやるべきだみたいな考え方の方、親御さんもまだいっぱいいますよね。

○委員 いい、悪いは別にして、日本の文化ですから。ヨーロッパとか、先ほど出ました、いわゆる地域スポーツですよ。よくドイツで始まったというあれですけども、それと日本の文化としての部活という土台は、気持ちの中でなかなかなくなるのではないかな。

○委員　そういう意味で質問なんですが、スポーツ・文化クラブの人が顧問をやっている
というか、東深沢中学校の卓球部として部活指導員をやっておられる。それはいつ頃から
やり出したんですか。

○委員　結局自分の子どもが卓球部だったんですよ。そのお父さんも卓球が好きで、ずっ
とやっていて……。

○委員　じゃ、保護者なんですね。

○委員　保護者なんです。もちろんクラブにも卓球部がありましたから、その保護者はク
ラブでやっていた。子どもが卓球部に入った。そんな関係で指導に入ったという関係です。
子どもが卒業してもまだやっているということです。

○委員　完全に地域の……。なるほど、そういう事情があったんですね。学校は、じゃ、
お願いしますとはなかなか言いづらいのかなと思って。

○委員　学校が誰にですか。

○委員　地域にお願いしますと。先ほど言った部活は学校がやらなくてはいけないという
価値観だと、なかなかお願いしますと言うのが……。だから、それがなぜ可能になったの
かなと思って、そういう質問を聞いたんです。

○委員　今の場合はたまたま親と子の関係であれですけれども、やっぱり組織化されてい
ますから、そういうコネクションである程度見つけてくるというのもありますね。組織が
なければそういう動く人もなかなかいないから、その組織のよさもあるかもしれませんね。

○委員　逆に学校側に卓球を指導できる先生がいなかったというのがやっぱりあるんです
か。

○委員　そうですね。いなかったんですね。

○委員　人材がない場合は、もしかしたら可能性が開けるということですよ。例えば
テニスとか。

○委員　テニスは硬式テニス。軟式、ソフトはあったんですけれども、硬式テニスのほう
は指導者がいなかったということですね。

○委員　教え子なんかも中学校の教員になって、テニスの経験なんて一つもないのに、ず
っと野球で来たのに、いきなりテニス部の顧問を任されて、もう困って、本人はやる気満々
で、自分でテニスクラブに入ってやっていたんですけれども、途中で忙しくて無理になっ
て。こういうものがあると、もしかしたら可能性が出てくるケースはありますものね。

○委員　いない場合には廃部ということもありますから。

○委員 それか、もう形だけ顧問でみたいなものですよ。

○委員 私も実態はそうですよ。全然素人で、入ったら、やれと言われて、はいと。ソフトテニスですけれども、一緒に子どもたちと一緒にやったという経験はあります。そんな例は中学校ならどこにでもあります。

○委員 3割から4割ぐらいはそうですよね。

○委員 でも、子どもたちもかわいそうなんですね。やりたいのにやれない、指導者はいない、顧問は素人だ。顧問だって素人で、やりたくないと言ってはいけないけれども、土日に試合があったらついていかなければ駄目だ。私が野球を持たされたとき、野球の場合には審判をやらなければ駄目なんです。知らなくても、知ったふりをして「ストライク」とか、連れて行くだけではなくて、責任者という意味と部活の顧問ですね。

○委員 あと、中体連とか、そういうあれで大会運営の役割を振られるといいますものね。

○委員 そうでなくても野球の場合には審判が4人いなければ駄目ですから、一番易しいファーストならやれますとか、そういう場合もあります。だから、それをどうやっていくかというのはなかなか難しいです。

○議長 全体的に考え出すとなかなか難しいですね。

○委員 文科省とかスポーツ庁とかはかなり大きく掛け声をかけているけれども、これについては具体策が出ていないですよ。だから、総合型地域スポーツクラブをどうしようかという、もう少し具体的なものを出してくればいいんですけれども、このように地域で独自にやっていかなければ駄目だというのはまだまだ丸投げみたいな感じ。掛け声だけはいいいんですけれども。

○議長 学校や役所からの話とか、協議する場みたいなものはないんですか。

○委員 今のところ、教育委員会も多分動いていないのではないかなと思います。どうですか。

○議長 今、準備しているところですか。

○事務局 検討会みたいなものは立ち上げて、進めているとは聞いています。

○議長 多分どこでも検討しているとは思いますが。しないわけにはいかないのです。ただ、今年は、それを具体的なところまでフォローして、検討するまではいっていないんですか。来年ぐらいは動かないといけないのではないかなと思います。

○委員 総合型地域スポーツクラブの関係者もそういう検討会には入っていますか。

○委員 入っていたかな。

○議長 多分入っていると思います。

○事務局 ちょっとメンバーまでは把握しておりませんので。

○委員 ぶんか村から1人いると思います。

○委員 何か私もちらと、うわさレベルですけども、同僚の教員が世田谷区の部活動の検討会のメンバーにいる。船橋希望の先生もそのメンバーにいるといううわさを聞いたので、多分学校計画のほうでそういう検討会をやっているんですかね。

○事務局 検討会は、お名前はちょっと忘れてしまいましたけれども、国士舘の先生も入って……。

○委員 たしか教育学科の先生……。

○事務局 学識で入っていると思います。

○委員 そういう話を本人から聞いて、ああ、そうなんだと。

○委員 じゃ、少しずつ具体化してくるかもしれないですね。そういうことが出てくると、ぶんか村もそうですけれども、総合型スポーツクラブも当然関わりをコミットしていかなければいけないと思います。

○委員 多分モデル事業みたいなので指定されるのではないですか。

○議長 世田谷の場合にはそういうものがありますからね。ないところだと、地域の方と話をするというのは、誰が地域なのかというところからスタートしないと、もうどうにもならないんですけれども、今おっしゃったように20年継続してそういうことをされている団体があるとなると、その中から少し御意見を伺うという形で進めるのが普通だと思います。

○委員 だから、入り口として、総合型地域スポーツクラブ、地域と学校との連携といったらば、場合によると、中学校の場合には、そういう入り口、切り口が大きいと思いますね。

○委員 各クラブ同士のというか、クラブが1つになった集まりというか、会議とかは持つんですか。

○委員 総会と月1の運営委員会。

○委員 25クラブが集まる……。

○委員 月1は、運営委員、役員会ですね。総会は年1回。全部の会は11月のスポーツ・文化クラブの大会ぐらいからかな。全部が集まることはないかな。

○委員 じゃ、例えばバレーボールとかのコーチにパワハラがありましたみたいな問題が

起きたときに、どこが解決するんですか。

○委員 運営委員会ですね。会長以下、これは幹部ですけれども、それプラス運営委員会というのは……。やっぱりクラブの代表者会というのがあるんだ。ごめんなさい。運営委員会は、基本的には代表者が全部集まります。それが月1。

○委員 地域の老人会みたいなものがあるではないですか。歩こう会をやったりとか、趣味の仲間同士が集まって、そういうものを一緒にやってみましょうみたいな。例えば老人会だとお年寄りばかり……。

○委員 そういうものとは直接は関係ないみたいですね。

○委員 そういうものとどう違って来るんですか。対象が子どもを含めた全対象……。

○委員 学校の施設を使っているということと、役員、幹部はやっぱり大体PTAのOBが多いのかな。老人会とかそういうものとは直接関係ないんですが、クラブができる前のベース、つまり東深沢・等々力コミュニティという1つの組織があったんです。PTAのOBがつくったコミュニティ。もう10年ぐらい前にできたのかな。いわゆる子どもたち、中学校が荒れたときに、地域で何とかしなければ駄目なのではないかということで、PTAのOBさんが集まってこういうコミュニティをつくったんですね。それがまだあるんです。それが元になってできたわけではないんですが、コンセプトは違いますので、コミュニティはみんなそろって学校を応援しようではないかということでできたので、それとは違うんですけれども、そういうものもある。これと幹部とか役員がオーバーラップしているところがあるんですが、コンセプトは違いますので、そういう組織があるということはありません。だから、町会・自治会は特に関係していないかな。ただ、町会・自治会の長さん、頭、ヘッドの人たちは、そういうフェスティバルがあると皆さんを呼んでいるようです。

○委員 PTAのOBのコミュニティという話だったんですけれども、僕は前から思っているんですけれども、おやじの会とかで現役のお父さんたちに手伝ってくれと言うと、当然平日だったりとかは無理だし、現役の小中学生のお父さんだったら子どももまだ手がかかったりするし、時間的な制約はあるんですけれども、OBになって、しかも、60歳過ぎとかで退職となると、元気なお年寄りがだんだん増えるではないですか。僕は今そういう妄想をしているんですけれども、そういうコミュニティだったり、つながりがあれば、そういう人たちに声をかけて、手伝ってくれないとか、さっき老人会と言いましたけれども、自分たちもその活動をしたいし、子どもに指導もしてというようなことが今後でき

るのではないかなと妄想しているんですけども、どう思いますか。

○委員 コミュニティーというのはほぼそれです。だから、非常に年齢層が高いです。でも、元気です。

○委員 だから、今はそういう組織がない気がするんですよ。僕は桜小で、桜小応援団という団体とかがありますけれども、何かもったいないなというか、退職されている知り合いとかを見ると、手持ち無沙汰というか、やることがあまりなくて、それはそれでもったいない。でも、元気で、自分で料理教室に行ったりとかしているけれども、もっと地域活用というか、地域で活躍する場があれば、どんどん入っていく場があればいいのになと思うんです。

○委員 委員が言っているのが理想、まさにそれだと思います。もともとPTAで活躍していた人たちが、子育てを終えて、子どもたちが大きくなって、たまたま言い出す人がいて、もう一つは、子どもたち、中学生が荒れた、学校がちょっと困っているようなので、じゃ、地域で盛り上げようということで始まった。それが今も続いているということです。この前もそのコミュニティで現役の中学生80人ぐらいを猪苗代湖のスキー教室に連れていったと言っていましたけれども、ウオークラリーをやったり、花壇に花を植える活動をやったり、この前はハロウィーンで何かやったのかな。言葉は悪いけれども、子どもたち、生徒をだしにして、みんなで楽しんでいるという感じがあります。

○委員 まさにおやじの会ですね。

○委員 そういう感じがある。おやじの会みたいに若くないんですけども、アクティブシニアといいますか、元気がいいお年寄りです。だから、多分委員が言われている形ではないかなというふうに私は想像しましたけれども。

○委員 東深沢に行きたくなりますね。

○委員 ぜひどうぞ。言っておきます。

○委員 東深沢小学校ですけども、今おやじの会のオール世田谷のメンバーでいるんですけども。

○委員 じゃ、多分知っていると思います。総合型地域スポーツクラブも、コミュニティも、存在はほとんど違いなと思います。

○委員 ちょっと本題から外れるかもしれませんが、部活の話があったではないですか。私、オール世田谷おやじの会をやっていますけれども、同時におやじ日本という組織の理事もやっているんです。そこで話し合うのはもうちょっと先を見たというか、例

えばA Iが入ってきたら子どもたちの仕事がなくなってしまうのではないかみたいな話だったり、自律した子どもたちを育てるにはどうすればいいのかとか、どうして日本人にはスティーブ・ジョブズみたいなのが出てこないんだみたいな、経済界で言われているような……。そういうことに関わっているお父さんたちは現役でも多いので、そういうものを見たときに、学校の教育はこのままでいいんでしょうかみたいな話合いをする機会があって、分かりやすいのが、中高生に勉強のうち暗記に使う時間はどれぐらいですかと聞くと、8割、9割だと言うんですよ。でも、暗記って、今はネットがあれば、調べたらすぐ出てくるではないですか、覚える必要が本当にあるんだろうか、学校の教育は何を教えればいいんだろうかみたいな話合いをしていて、答えは、みんなで協力して目標を達成するためにはどうすればいいかという訓練をしましょう。暗記するよりも、実はそれが一番大事ではないのか。コミュニケーションの取り方だったり、連携の仕方だったりとかを学校で教えるべきではないかという話合いをしていて、そうすると、学校の中でそれに一番当てはまるのが部活なんです。

というふうに、学校教育は、僕もそうですけれども、日本人は英語を勉強してもしゃべれないではないか、学校教育は何を教えているんですかねみたいな。ネットが入ってきて、知識とはいえ、調べればすぐ分かるし、一番足りないのは仲間同士で連携することではないのという話を、ちょっと蛇足ですけども、することがあって、実際に中学生の話を聞くと、うちの近くだと、あまり部活が盛んでないので、越境したがるのかという話があったりとか、そうすると、子どもがかわいそうですよね。部活がない、あまり活発ではないような学校に行ったら、やりたいこともできないからというような実情があるらしいので、そうすると、こういう活動だったり、地域でそういうクラブ活動をやるだったりとかいうのは、とても羨ましいし、とてもいいなと思って聞いていましたという話です。

○議長 おやじ日本はおやじの会の人たちが割と多いんですか。どういう団体なのかな。

○委員 理事長の元副都知事の方でもっているんですけども、この人はもともと警察官僚です。暴走族に便所掃除をさせて更生させたみたいな、警察官僚なんですけれども、教育にとっても関心のある方です。その方がおやじ日本という組織を立ち上げて、NPO法人なんですけれども、警察官僚だったので、厚生省とか、文科省とかいう役人の方がメンバーの中に結構いたりとか。だから、おやじの会というよりか、どちらかというと、そちら側、役所系のそういう意識のある人たちが集まっているみたいな会なので、現役のおやじの会でそれに関わっているのは、逆に言うと結構珍しい。

○議長 経済界系ではない。財界系のイメージで提言するわけではない。

○委員 ええ。今のお話だと、多分部活だけでなく、特別活動がそれに当たると思っています。学校用語で言うところの特別活動というやつです。それは、いろいろな行事とか、文化祭とか、合唱コンクールとか、児童会、生徒会みたいなもので、多分部活だけではなくて、学校はそういうものに力を入れて、今、皆さんがおっしゃったようなことをやるというつくりにはなっているんですね。それがいろいろな世の中の変化の中で学校でやるころの普通の授業みたいなものと、特別活動と、そのときのシステムもあるんですが、生徒指導みたいな、その3つをどのようにこれからの学校がつくっていくかというところで先生方も悩んでいるのではないかなと思っています。

文科省なんかは、暗記のところはA I でやって、あとは問題解決というか、世の中にある問題をみんなで話しながら、共存してやっていくみたいなことを言っていますが、すぐに協働してとか、問題解決をというのがなかなかできないですね。先生方も今までのやり方から、そこで迷っている感じですね。そこに、D Xとか、A I とかという形のものを主に改革しようという人たちやら、経済的な観点からもありますし、学校は何をしているんだと言われると、僕だけではないですけども、関係者はちょっと心が痛いところがありますが、何もしていないわけでもないけれども、全部暗記やA I だけでできるとも多分先生方は思っていないし、いろいろしていますよね。しているんだけど、それがなかなか目に見えなかったりというところもあるのかなと思っています。

今みたいなことでもいいですが、ぜひお話しいただいて、同時にここは社会教育委員の会議なので、社会的な部分を視野に入れながら、皆さんとお話しできたらなと思っています。でも、学校教育が関係ないわけではないので、ぜひそういったものも出していただければと思います。

委員、いかがですか。小学校とはちょっと違うかもしれないけれども。

○委員 部活の是非とか、意義とかについてはちょっと答えが難しいなとは思っているんですけども、地域にこのようなスポーツクラブがあって、小学校がお願いすることができるとしたら、私は大いに使いたい。小学校の先生たちも、低学年は担任の先生が全教科持っているけれども、だんだん上に上がってくるときに専門的なところを入れたくなりますよね。そうしたときに、例えば体育の授業でスポーツを見ていたときに、例えばそこに専門的なゲストティーチャーが来ると俄然違うんですね。企画の中で突然そのような人を呼んでやることはあります。陸上の選手とか、走り方教室とかなんとかとありますけれど

も、たったそれだけの時間でも、得意な人が来てやるというのは子どもにとってすごく教育的な意義があります。

もしその方が地域にいて、長い時間をかけて関わってくださることが可能になるとしたら、それはそれですごくありがたい話ですが、そのとき教員とどのように協働するかがポイントになるんです。学校側の狙っている指導と地域の人たちが入ってきたときの連携がうまくいくかどうかは、特にまだ何もやっていない今の小学校の段階から言うと、かなり協議を重ねなくてははいけない。もうちょっと分かりやすく言うと、学校にも部活的なものといったときに、小学校の場合だったら、例えば吹奏楽とか、合唱団とかがあるんですけども、あれははっきり言って課外活動ですね。ほとんど部活みたいなもの。時間外の音楽の先生が朝練とか、放課後とか、そういう授業以外のところで時間を割いてやっているけれども、そこでもしこういう地域の専門的な人が一緒になってやってくださったら、どんなにいいだろうかなというのはあります。

ただ、進めていくときには、学校側の指導者と地域側の指導者が同じ目標を持ってやらないとうまくいかないだろうなとは思いますが、専門分野は限られてくる、教員だって全てオールマイティーな人はいないので、そのように地域の力を使わせてもらえるというのはいい環境だと思います。

○議長 保険とか指導者の問題はあるけれども、それとはまた別な話として、学校の先生方と協議して、同じ目的を持って……。

○委員 地域の方が学校に入るときに、地域の方たちにとってのメリットというか、うまみはあるんですか。

○委員 それは施設が使えるということがメリットとしては一番でしょうね。

○委員 なるほど。スポーツとか、文化とかに限らず、私は、学校としてはゲストティーチャーを結構開いていて、相談によってはこの方に来てもらいたいというのでカリキュラムマネジメントしているほうだとは思いますが、今回も新しいところに連携を手広く広げている途中なんですけれども、そのときに地域の方からいただくだけではなくて、そちらの方の活動目標というか、狙いがこちらに来ることによって達成できるような側面もあったほうがいいだろう。一方的にいただくだけではなくて、そちらにとってもいいことがないといけないかな。

1つは、子どもたちが一緒に関わっていることによって、子どもが少し大きくなったときに、その地域の文化なり、スポーツの豊かなまちになるようにというか、まちづくり、

人づくりに、長い目で見たときに少しでも貢献できればいいなとか、コミュニティの中で知り合いが増えることで防犯的なものもいいたろうしなと思います。

○委員 地域でのコミュニケーションというのはありますね。

○委員 私は入っていないけれども、その地域に限りなく近いところに住んでいて、あちこちでそのポスターを見たときに、それだけでも安心する。子どもたちのところにそのように入っているし、そういう文化的なものとかスポーツ的なものがこの地域にたくさんあると思うだけでも、何となく豊かな気持ちになれるというのがあります。参加はしていないけれども、あるんだなということだけでありますね。

○委員 小学校のメリットというのは、部活がないことで逆に施設が空いているという意味では、スポーツクラブに関してはあるかなと思います。

具体的には駒沢小学校が拠点のこまざわスポーツ・文化クラブというのがあるんですね。当時の校長先生のときに駒沢小学校で改築があつて、実は東深沢中も改築のときにできたんです。駒沢小学校も改築で新しくなったときにできたんです。こういうものができるのには、そういう1つのきっかけも必要なんです。そういう意味のメリットと、駒沢小学校の場合、私の知る限りでは、バレーボール、剣道等幾つかのクラブがあるんです。それを地域の人が指導しているということで、駒沢小学校ももう10何年になるのではないかなと思います。だから、小学校は部活動がないですけれども、そういう意味では、総合型地域スポーツクラブとコンセプトは同じなんですけれども、部活とのタイアップはない。ただ、地域の中の施設として、そこが拠点になって地域の方が教えているという意味では同じコンセプトであるかなと思います。だから、施設のメリットと校長先生が言われた、いわゆる地域コミュニティの1つの核みたいになっているというメリットは確かにあります。当時の校長先生も、前に話したときにそれが狙いだと言われていました。

○議長 まだほかにもおありかと思いますが、時間の関係がありますので、総合型地域スポーツクラブの話は一旦区切りますけれども、また後に関連する話題でできるときがあると思いますので、ありがとうございました。

○事務局 次に行く前に、先ほど総合型地域スポーツクラブは8つあるということだったんですが、具体的に、中学校が東深沢中、用賀中、烏山中の3校、小学校が城山小、駒沢小、尾山台小、若林小の4校をベースに活動している。もう一つはニチジョクラブということで、日本女子体育大学をベースにやっており、計8つとなります。

○議長 では、時間の関係もあるので、委員、お願いできますか。

○委員 子どもぶんか村です。「船橋」はつきませんから、取っていただければと思います。千歳台もあるので、船橋に限らないということで、ただの子どもぶんか村と私たちは呼んでいます。

子どもぶんか村のクラブ活動は大体月に1回とか2回とかで、とても緩いクラブ活動です。でも、そのぐらいがちょうどいいと思っている子たちが来てくれていて、ちょっと増やしていったりとかすると、その日は行けません、行けませんみたいになってしまうので、激しく毎日やりたいという子たちは多分ここには来なくて、そういう地域の人やっている、行くと、何だかほんわかして、誰も怒らないし、上手だね、よくできたねと褒めもらえる緩いところなんだろうなという位置づけではあります。

より連携・協働するために何が必要か。私たちは常に学校と仲よくしたいと思っています。それは、管理職の校長先生とかだけではなくて、そうではない担任の先生とか、音楽の先生とか、体育の先生とか、美術の先生とか、そういう先生たちと仲よくなりたいと思っています。それは、場所を貸してほしいとか、講師になってほしいというものもあるけれども、子どもの話がしたいということがあります。ちょっと難しい親子に巡り会ったとき、学校の先生たちはどうしているのかなと思ったりとか、そういう話ができたらいいないつも思っているけれども、実現したことがないですね。学校の先生たちというのは、私たちからすると非常に遠い存在です。ここでシャットアウトされている、これ以上は入ってこないでくださいと言われていているような感じです。お茶でも飲みながら教育について語るとか、自分の持っているビジョン、先生が持っているものを伺いたいとか、そういうことをすごく私たちは、校長先生だけではなくて……。校長先生はすごくおしゃべりしてくださるけれども、そうではなくて、あの先生は何であんなに怖いんだろうと子どもたちから言われている先生とも話してみたいなと思うけれども、全然そういうチャンスがない。学校とより連携したいと思う私たちからすると、もうちょっと近い存在になってほしいな。何となく邪魔というか、余計なことをしないでほしい、入ってこないでほしいと思われているような気がしています。

連携・協働における障壁になっているものが何かと考えると、その子についてぺらぺらといろいろなことをしゃべってはいけない、家のこととかなんとかをしゃべってはいけないという守秘義務がいっぱいあるのかなと思っています。私たち地域のほうがその子についていろいろな情報を持っている場合もあるし、今お父さんとお母さんが離婚調停中で、子どもを取り合っているとか、それで子どもが学校へ行かなくなってしまうとか、そん

な情報もあるので、もっと話せたらいいのになとも思っています。障壁になっているのは、守秘義務とか、そういう個人情報を守りなさいということなのではないかと思えます。子ども一人一人の幸せ、学校が楽しい、地域が楽しい、友達と生き生き過ごしてほしいと願っているわけで、そのためならどんなことでもしたいなという人たちが集まっているので、何とかできるチャンスが来ないかなと思っています。

○議長 これはどういうものというか、どこで配られている……。

○委員 それは、子どもぶんか村で1学期に1回出す、地域の人たちに様子を知ってもらうものです。連絡とかそういうものは、私たちくらぶ内ではSNSとかを使いながらしているんですけども、それだと地域の人たちから……。昔はそれを毎月出していたんですけども、SNSとかを使うようになってから、あまり必要なくなってしまったんですが、ぶんか村は最近あまりやっていないのと言われてしまったので、地域の人たちにやることが分かるように、それを1学期に1回作って、報告しているというものです。

○議長 配るんですか。貼るんですか。

○委員 町会の回覧板に乗せてもらったり、子どもたちは家に持って帰って。4000部ぐらいですかね。あと日赤さんとかに配ったりしています。

○議長 SNSだと、そこのメンバーは見るけれども、そうでない人は逆に目に触れなくなってしまうので、メンバー以外にも知ってもらうためのパンフレットとしてという意味ですね。括弧の中にあるのはそのくらぶの代表の方と思っていいんですか。

○委員 はい、代表の方です。

○議長 そういうものだそうです。ここにあるのが全部なんですか。

○委員 そうです。

○議長 8。

○委員 8。

○委員 何千部と言いましたっけ。

○委員 4000部。

○委員 4000部だと結構お金がかかりますよね。

○委員 それでも今は安くなっているので8000円とか、そのぐらい。今は完全データ入稿のできるのです。昔はそれこそ手刷りで刷ってしていましたけれども、年に3回になったので。カラーで。

○委員 会費は取るんですしたっけ。

○委員 会費はそのくらぶによって違うんですけれども、年間2000円とか、そのくらい。月ではなくて、年間3000円とか。

○委員 場所は学校で、指導員の方は……。

○委員 私たちで見つけます。

○委員 お金は払うんですか。

○委員 はい、払っています。そんなにたくさんではないんですけれども、1回で2000円かな。だから、3時間ぐらい拘束して、2000円の謝礼を払うぐらい。その後まだミーティングしますとかいうと、500円ぐらいのお弁当は出るんですけれども、その程度しか出せないです。でも、講師の方にはちゃんとお支払いしたいねという思いで、地区委員会の委託料ではとても賄い切れないので、子どもぶんか村基金というものを募って、町会さんとか、地域の方、保護者の方とかが寄附してくださる基金をつくっています。

○議長 以前にもお話しいただいたかもしれませんが、先ほど20年という話がありましたけれども、子どもぶんか村は継続して……。

○委員 子どもぶんか村を始めたいと思ったときに、東深沢に見学、勉強に行きました。当時の校長先生と一緒に見せていただきに行って……。

○委員 じゃ、その後かな。

○委員 そうです。だから、その後なので18年です。

○委員 小学生と中学生……。

○委員 OBたちも呼んだり、高校生、大学生たちも……。

○委員 小学校と中学生は人数的にどれぐらいの割合ですか。

○委員 小学生のほうが多いです。小学生が圧倒的に多いですね。

○委員 子どもぶんか村は大人がいないんですね。子どもだけなんですね。

○委員 そうです。子どもだけです。そこが東深沢さんとちょっと違うところです。やっていると、結局大人のほうが楽しくなってしまうので、大人はなるべく支える人にしてもらっています。

○議長 東深沢の話だと、東深沢中学校の学生以外の地域の大人とかと一緒に卓球なら卓球をやるという形で、こちらは子ども……。同じ学校が多いんですか。そういうのは関係ないのかな。

○委員 4校なんですね。千歳台小学校、船橋小学校、希望丘小学校、船橋希望中学校の

4校がまとまりなので、その子たちが来ています。

○議長 同じ学校とは限らず、そこに集まって。

○委員 今、学舎と呼んでいるんですけれども。

○議長 子どもたちが集まってやっているという感じですね。

○委員 年に1回、発表会をするので、その発表会のために子どもたちから実行委員が出て、どういう発表会をしようか、今年のスローガンはどうしようかとか。この間は開催の形式について考えるという会で、入場制限をするのか、しないのか、配信をするのか、しないのか。中学生たちみんなも意見をいっぱい言ってくれて、毎回面白い会議になります。

○議長 先ほど委員が言われていたような話ですね。これは学校のクラブではないし、学校教育とは直接関係はないけれども、子どもぶんか村ではそういうことも子どもたちがやっているということですね。

○委員 そうやってすごく自信をつけて、学校でも何かの役を引き受けたりとか、そういうものにつながっていったりするのを聞くとうれしいなと思います。

○委員 年に1回、フェスティバルがあるんですね。

○委員 はい。

○議長 時期はいつ頃とかあるんですか。

○委員 3月の一番最後です。

○委員 コロナ禍でもできましたか。

○委員 コロナ禍で、1回目は絶対中止みたいなの……。地区委員会なので、区の人たちからそのように言われてできなかったんですけれども、2回目はもう絶対やると言って、無観客配信でやりました。

○委員 2021年のオリンピックみたいなものだ。

○委員 そうです。でも、とても好評でした。あっ、こんなことをやって、できるんだと周りの人たちみんながそれを知って、それからPTA活動もできるようになったり、研修会をするようになったりとか、あっ、配信でこんなことができるんだというのは私たちが一番早かったのではないですかね。

○委員 3月の最後のその日に、各くらぶ一斉に発表会なんですか。

○委員 そうなんです。舞台発表をしたり、展示発表をしたり、茶道はお茶室がオープンしますけれども。

○委員 学校の発表会とは違うんですよね。くらぶの発表会。場所は学校なんですよね。

○委員 はい。学校の発表会とちょっと似た感じかもしれないけれども、緩い。きちんきちんとするばかりではない。

○議長 教員が指導しているわけではないですからね。

○委員 そうです。なので、ふにゃふにゃとやっても、本人は大満足という子たちもいるし、子どもたちの自主性というか、子どもたちがやりたいと思うことをやっていると思います。

○委員 逆に言うと、小学生だから中学校みたいに部活がないから、部活の代わりと言ったら言葉は悪いだろうけれども、要はそういう好きなことができるというコンセプトですよ。指導は学校の先生だけではなくて、地域でやっている。

○委員 学校の先生の場合もあるんです。ものづくりクラブは美術の先生が担当してくださったときもあるし、演劇は中学校の国語の先生がしてくださったときもありますけれども、今は丸福ボンバーズというまちの劇団が引き受けてくださっています。

○委員 某中学校の校長先生もバイオリンを弾くもんね。だから、そういう意味では連携、教員が指導してくれるというのはうれしいですね。

○委員 そうですね。船小の先生、美術の先生と夏休みの講座とかをやりました。

○委員 当然に自分の学校の子どもたちもいるだろうし。

○委員 そうです。

○委員 活動日は平日なんですか。

○委員 土日だけです。平日はやらないです。

○議長 それには何か理由があるんですか。

○委員 もともとは、5日制になって、その土曜日をどうするかということでこれが始まっているので、その土曜日を主に考えています。

○委員 土曜日に3時間ぐらいやるという感じですか。

○委員 午前中にやったり、午後3時間ぐらいですね。

○議長 週5日制が言われたときに、地域にそういうのが出てきてほしいというのが行政の考え方だったんですけども、そんなにうまくいっていないので、もしそういうものが背景にあるとすれば、それはかなりうまくいっているんでしょうね。

○委員 あのとときも町会長さんが一番最初に私がやるわと言って、じゃ、東深沢に見学、勉強に行きましょうとか言って、教えていただいたりしました。

○委員 週休2日制というのは、確かに地域の動きのきっかけにはなっていますよね。

○委員 そんなことが地域でできるんだと。町会の人たちもびっくりしたと思いますし、町会の人もすごく好意的に受け止めてくれました。全然意地悪でないし、今は町会から基金に寄附してくださっているし、すごく喜んでいただいています。発表会にもいっぱい来てくださって、楽しいね、子どもたちが笑っているわねとか言って。

○委員 当時は青少年地区委員会が何らかの形でどこも動いたでしょう、週5日制の。

○委員 そうですか。

○委員 いや、こんなふうには動かないけれども、ボーリング大会をやったり、何らかの形でやったではないですか。動きはあったんですよ。ただ、このようにしてまとまったものができたというのは数少なかったんですよ。

○委員 地区委員会の会議でそれぞれみんなやりたいものを言ったんです。私は演劇をやりますとか、私はコーラスをやりますからって。じゃ、それぞれやりましょうかという感じでした。

○委員 だから、今でも地区委員会ごとにはぽつぽつとはやっているんだけど、こういうまとまっているものがなかなかできなかった。だから、確かに総合型地域スポーツクラブは、少なくともその一環であったんですよ。

○委員 世田谷区だけというか、ほかにはないですよ。公民館とか児童館の中で生け花とか、ものづくりとかをぽつぽつやっているところはあるというか、公民館や児童館があればやっているんですけれども、それぞれに違いますものね。今も続いているというのは、とてもうまくいっている例なのかなと思います。

○委員 施設は学校だと思うんですけれども、例えば楽器とかは個人持ちのものですか。

○委員 いえ、学校で買ってくれたりしています。

○委員 バイオリンとかを……。

○委員 はい。バイオリンも学校の予算で3台買っておいたよとか言ってくださる先生とか、時々そういう……。前の部活の先生が買って、使わないで眠らせている吹奏楽の楽器とか……。

○委員 オーケストラを部活で持っている学校は、世田谷区内では多分ないと思うので、どうしたのかなと思って質問したんです。

○委員 あと頂いたりすることもあるけれども、頂いた楽器はメンテナンスにお金がかかってしまうことがあるので。でも、私たちのバイオリンは、そのようにして学校から貸していただいています。

○委員 学校の授業で使うことはまずないので、どうやっているんだろうと思って、ちょっと……。学校で使わないですね。

○委員 中学ですよ。

○委員 じゃ、生け花に必要な道具も学校のものなんですか。

○委員 それは頂いたものです。

○委員 花器とか。

○委員 剣山は消耗品で買っています。

○委員 そういうものが必要なんだよね。学校にないものを使っくらぶをやるときに、そういう設備を整えるための予算みたいなものがないとできないなと思って。

○委員 それは基金が買ってくれます。

○委員 財政は、町会からの寄附とか、そういうものプラス会費という感じですか。

○委員 会費はそこには入らないです。会費はほとんど講師謝礼に費やされて、それでも全然合わないの、基金から持ち出すことになります。

○委員 じゃ、財政としては基金のほうが大きいという……。

○委員 そうですね。ぶんか村活動に対する基金。地区委員会なので、研修もあるし、ぶんか村活動だけではないので、研修や環境整備にも使われています。

○委員 おやじの会で思うんですけれども、こういう基金は人次第というか、組織化されているというお話をされていましたがけれども、あの人がいなくなったら、いつの間になくなってしまったよねとか、よくあるんですけれども、両組織ともそういう心配はないんですか。

○委員 どういうことですか。

○委員 あの人がやり始めて……。

○委員 講師がですか。

○委員 講師ではなくて、こういう取組自体。

○委員 取組自体、くらぶは変動的でいいので、いなくなったらやめればいいと私たちは思っていて、映像くらぶもありましたけれども、映像くらぶはプロのカメラマンが3年ぐらいかけて映画を3本ぐらい作ったんですけれども、突然僕はラーメン屋になるとか言って、もうなくなりましたから、そんなに無理してするという……。かるた会も何年もやっていたけれども、もう講師がいなくなって、コロナになってしまって、試合もできなくて、やめましようと言うから、じゃ、そうですねと。なので、別にやめてもいいし、ま

た新しいものがつくられてもいいし、これをやらなければいけないというふうにこだわっていることではない。

○委員 ここまで来ると、もう大丈夫でしょうね。8つのうちのほかはよく分かりませんが、東深沢に関する限りは、もうここまで来れば、20年も続くと、1人ぐらいやめても大丈夫なところまでは安定したということでしょう。

○委員 もう一つ伺いたいんですが、それぞれのクラブを取りまとめて運営している組織みたいなものはあるんですか。

○委員 それが地区委員会の理事だったりします。

○委員 前にお話しいただいたとき、地区委員会は実行と研修をされていると……。

○委員 すごい研修好きで、研修はすごくしますね。

○議長 研修の中身はどんなことなんですか。

○委員 研修会にメンバーとして集まると、何を研修しようかという話合いをがんがんにやっていくんですね。それがまたすごいんですけども、今、私たちは子どもたちに何を求めているんだとか、私たちはどういう子ども像を持って子育てをしているのかとか、今足りないものは何なのかしら。そういうものを若いお母さんたち、PTAのお母さんたちもみんな入ってくるので、そうやって、じゃ、何を研修しよう、そのためにはどんな先生がいいかというのをみんなで考えていくというのが研修の醍醐味というか、私、有名な何々先生を知っているからこれでとか言って、ぼんと下りてくるのでは全然なくて、まず何を研修しようか。LGBTをやりたいと熱く語る人もいて、みんな最初は引いていたけれども、そのうちだんだんと子どもたちにも必要ね、そうね、そういえば何々ちゃんも女の子だと思っていたら、男の子だったわねとか、そういうふうになりながら、みんなで研修をしていったりとかします。

○委員 何か理想があってというより、今ここに焦点を当てて、ここに必要なものを追いかけて、つくっている感じがすごくして、そこには評価がなく、緩い感じであるのが、今の学校や社会にはない、大人も子どもも評価されない場所。お話を聞いていて、そこがよいような気がします。何をしても、いいね、いいねと、そこが前提というか、今これを行っている君の存在自体がいいんだよという感じをお互いに楽しめるのがぶんか村のよさかなとすごく思って聞いていました。

○議長 さっき委員が言われていたおやじの会の仕組みに似ているなという感じがします。

今お話しされたのは、委員が言われている言葉としては研修が大事だと言っているんだけど、多分その研修は「研修」という言葉とは違うものなのか、普通で言うところの研修会の研修みたいな、決められた講師が来て、その講師が何かをするというのと、今お話しくださったものとはちょっと違うような気がしました。学び合いというか、これから何を学んでいこうかみたいなことを含めて研修と呼ばれているわけですね。そうすると、今、委員が言われたのとかなり近くなってきて、一般的に言うところの研修とはちょっと違うイメージでのいろいろ語り合って、学び合って……。

○委員 語り合うというのにすごく時間をかけていると思うんです。

○委員 だから、もう究極の社会教育団体だなと。自分たちで考えて、じゃ、今度はこれをやってみようかとか、学ぼうかとみんなでやっていく。ただ、その背景には、さっき言ったように緩くと言っているのではないですか。ある程度緩やかに、いい意味でのルーズさというのが秘訣なのかもしれないですね。きっちり上下関係とか、徹底的に組織化されてしまうと、もう逃げたくても逃げられず、やりたくなくてもやらざるを得なくなってしまうのではないですか。

○委員 多分みんなそういうのが大嫌いな人たちだと思うので。

○委員 とてもいいですね。だからいいんだと思います。

○委員 人から指図されるとか、そういうものが大嫌い。

○委員 だから、逆に、それこそ学校とかなり結びついてしまうと、そのよさが多分なくなってしまうよね。もしかしたら。

○委員 だから、もうちょっと学校はこちら寄りになってほしいというか、先生たち、もうちょっと開いてみたらどうかなと私は思います。

○委員 何でもうちょっと距離感が縮まらないのかと先ほどおっしゃっていましたがけれども、学校はどうしても忙しいのもあるし、こんなことを言ってしまったら、また批判されてしまうのではないかという防衛感もあるんですか。どうなんですか。あとは、先生になる方も、これからだと思うんですけれども、若い先生たちが多くなってきて、ちょっと地域との関わり方が分からないんですかね。どうなんですか。

○委員 そういうものよりも、まずは時間がないのが一番と思う。

○委員 余裕がない。

○委員 でも、自分のところで考えれば、時間をつくってあげればプラスアルファのことをやりたいと思っている人は結構いるかなという実感はあります。私も何で近寄らないの

かなと一緒に思ってしまうかもしれませんが、同じような価値がないのかしら。演劇くらぶとかでも、やっている演劇の内容とか、好きならやっていけばぐらいの離れ具合。そこに一緒に関わってやりたいなというふうにはなっていない……。

○委員 好きだからやってくれているのではなくて、そこはプロが入っているので、すごく楽しい。

○委員 だから、やっている内容に対してどうなんですか。私も分からないし、想像でしか言っていないけれども、見にも行かないでしょう。

○委員 見にも来ないです。

○委員 でも、それは、さっき言った活動日のこともあると思うんです。

○委員 土日だから。

○委員 行かないですね。地元だったら、近かったら何かのついでとかというのものもあるけれども、通勤に1時間半もかかるところから見に行くというのはちょっと考えにくい。そういうものもあると思います。例えば発表会があって、子どもがやっているところを見にいききたいな、応援したいなという気持ちのある人はいるのではないかと思うんですけれども……。

○委員 子どもたちは先生にお手紙を書こうとか言って、先生に招待状をつけますけれども。

○委員 なかなかそこが悩ましいですね。

○委員 でも、それが何人かの先生に集中してしまったから、校長先生から、人気のある先生と人気のない先生になってしまうから、それは駄目となってしまって、1人1枚とか言って……。恐ろしいですね。

○委員 学校の先生がなぜそこに行けないかというのは、先生も仕事を外れれば一人の親だったり、別の地域で何かをしている人だったり、自分の暮らしがあるではないですか。そことのせめぎ合いがある。こんなことばかり言っていると、いつまでも連携できないような感じの意見になってしまうけれども、もうちょっと近いところに住んでいたら行きやすいですね。あとは、子どもの声を聞いてくるのはすごくいいことだよというのは、最近の先生たちは結構分かります。だから、地域行事とかみたいなのところに出ましようねとかと校長が言ったとしますが、そうすると、できるだけ都合をつけて行きますよという姿勢はあります。だけれども、土日が全くなくなってしまって、月火水木金土日、月火水木とこれが続くと思うと、やっぱりそこで負担感が出るんだろうなというのも想像できる。

○議長 土日やってというふうになると、結局教員は緩い活動ではなくなってしまうんですね。そうすると、好きなことでもだんだん疲れてきてしまうから、特に今の若い先生なんかは、子どものためにいろいろなことをしたいけれども、土日とか、夏休みとかは休みたいよねという感じ。

○委員 私もやっぱり土日は先生に休んでもらう、あるいは自分の地域のことをするとか、そういうことがいいだろうなと思うんです。だから、ふだんの日に学校に私たちが行って何をお話しするという……。

○委員 それはできると思います。

○委員 そんな時間もないですか。

○委員 いや、それはあるようにつくるべきだと思うな。放課後の時間ですよ。それは学校が努力してつくったほうがいいのではないかと思います。

○委員 じゃ、お願いとかしてみましようか。

○委員 いいと思いますね。分からないけれども、その4校の先生たちがどのぐらいぶんか村のことを知っているかということが——よく分かっているんですか。

○委員 はい。

○委員 じゃ、何かお互いに話す内容はきっとありますよね。子どもを取り巻く大人同士の話が弾むというのはいいと思うので、その時間をつくる努力はすべきだなと思います。

○委員 せめて年1回の3月の発表会なんかは、それこそ子どもから来てと言われて、嫌だと言う先生はいないと思うんです。逆に先生もうれしいと思うんです。だから、せめて……。でも、人気のある先生に集中って、そんなことあるんですね。

○委員 それはまずかった、失敗って。

○議長 あとは疲れてしまっているんだよね。

○委員 年に1回ぐらいは……。発表会というのも土曜日ですか。

○委員 発表会は日曜日です。

○委員 日曜日だとあれかな。時期によるだろうけれども。

○委員 そうすると、そういうところから来ていますね。

○委員 強制はできないしね。

○委員 私たちから行っても全然いいので。でも、行ったら、先生たち、つかまらない感じですよ。行っても忙しそう。

○委員 そういうふうに思われているんだったら、ちょっとまずいなと思います。やっぱ

り地域と連携した学校運営、学校経営と言っている以上、来てくださっていることに対して一緒に話しましょうの時間ぐらい取るべきだと私は思います。

○委員 子どもとか保護者は先生が来ると喜ぶけれどもね。

○委員 喜ぶ。

○委員 でも、それもなかなか難しいんだよね。若い人は結構時間があるけれども、家庭を持ったりすると難しいですよ。

○委員 それはあります。自分のお子さんが同じくらいだったりすると、そちらに行ってしまうですね。

○議長 行くななんて言うのも変な話だし、できない話なので。校長先生たちはみんな今のようなことをおっしゃいますけれども、普通の教員で、行きたいけれども、行けないとか、疲れてしまうというのはよく聞きますね。なるべく普通の日でも早く帰って、土日もゆっくりして、休んでいくと、教員になる人は大体そういうことが好きな人ですから、やりたくなってくるんですけれども、どうもそれができないくらいいろいろなことで忙しくなってしまうと、人が足らなかつたりということは現場でも言っていますし、先生の数が足りないみたいなことになってしまっているのです、そこを解決するためにうまく地域の人たちの力なんかも……。

○委員 先生とお話ししたいときは、まず校長先生にお話ししたいんですけれどもとかと言ったらいいんですか。

○委員 いいと思います。校長の敷居が高ければ副校長でも構わないし。

○委員 校長先生たちはそんなことはないんですけれども。

○委員 それをノーと言う人は、代表して言うわけではないけれども、地域の人がそういうふうにお話をしたいですと言ったときに、ノーと言う人はいないと思うんだけどな。学校側はいろいろな御意見にさらされているというか、両極端な意見を同時に聞いているので、何か話があると来たときに構えるのは、何だろう、何かまずいことをしたかなというのが先に立つ。先にいい話で盛り上がるとは想像できなくなっているという悲しい事実です。

○委員 それがあるかな。

○委員 でも、回を重ねてそういう話の場を持つと、いや、今日はよかったですねというふうになると思います。

○議長 普通の担任の先生は、校長先生たちがうんと言わないと時間が取れないことが多

いので、直接言っても困った顔をする可能性は大きいでしょうね。それは、校長か、副校長かに言わないと、自分で勝手に時間をうまく都合することはできないのではないかな。

○委員 私だったら面白そうだなと思うけれども、うちの地域のほうではないけれども…。

○委員 先生たちにとっても情報をいっぱいもらえるだろうなとは思いますが、知らなかったことを私たちがいっぱい知っている場合もあるので。

○委員 いい話を聞いたなという感じがします。努力してみます。

○議長 ありがとうございます。いろいろ話も尽きないですが、時間の関係もありますので、大体40分ぐらいはお話しできたかなと思っております。

　　次回の話をしなければいけないんですよ。

○事務局 そうです。

○議長 事前に少し事務局と打合せをさせていただいたときに、前回もお話したんですが、今回6回目で、5回のときにスケジュール案の提案が事務局からありました。そのときに、次回7回の定例会について、そのときの提案では資料2ですね。7回目で実践的連携・協働に向けた活動計画Ⅲということで、和綿プロジェクトの事例報告のお話を聞いたかどうかという提案がありました。それについていかがでしょうかということなんです。和綿プロジェクトのことを第7回に聞くこともありでしょうし、その前にもう少し違う、来年度に向けての活動を計画して、余裕があったら、次回7回ですが、年度が替わって8回目に和綿プロジェクトをしたらどうか、事務局からもどうしましょうねという相談があります。

　　和綿プロジェクトは私自身も詳しくは分からないんですが、委員のところに関わっているんだけど、まだ途中、始まったばかりだというようなことも……。

○委員 まだ1年たっていないんです。

○議長 あったりしたので、聞くのは勉強になると思うんですが、聞くとしたらどの時期かなというようなことも事務局とお話ししつつ、じゃ、今日、皆さんの御意見を伺って考えましょうということですが、補足があれば、事務局、お願いします。

○事務局 前回も資料2で御覧いただいているかと思うんですが、スケジュールに関して御提案させていただいたのが第7回ということで、3月にこういう事例報告をしたらどうかと、今議長が言われたようなお話を提案させていただいたんです。

　　ただ、改めて計画、スケジュールを見たときに、予定では5月、6月ぐらいに連携・協

働活動の試行をやっていただきたいということを考えたときに、事務局で提案させていたんですが、第8回だけで全て計画が整うかというと、これもなかなか難しいだろうというふうに思うと、参考にはなるかもしれないんですが、拙速に事例報告よりは、議長がお話しされたように、まずは試行に向けての活動を計画していく。余裕があれば事例報告を、あるいは難しいということであれば活動計画を7回、8回にしたほうがいいのかということも改めて考えたところでもありますので、この場で皆さんの御意見を聞きながら決めていければと考えております。

○議長 今、5月、6月が出ましたけれども、予定ですと、5月、6月に連携・協働活動を試しにもう少し進めていただくということで、じゃ、誰にということになると、今までお伺いしてきた子ども食堂、親父の会、そして今日の総合型地域スポーツクラブ、子どもぶんか村という既に連携している部分もあるので、無理にやるのが本当にいいかどうかという議論もありますけれども、委員のお話の中では、いや、こういうことだったらちょっとやってみたい。ぶんか村の新しい活動のプロジェクトではないけれども、そんな話だったら、委員からもそういうものはあってもいいのではないかみたいなことも出ておりますので、そういうのであれば、5月、6月ぐらい。学校側の都合も聞かなければいけないですけども、もしかしたらそういう新たな試みができるかもしれない。そのようなことを考えてみようということですね。いかがでしょうか。

○委員 和綿プロジェクトは取りあえず置いておいて、協働に向けてを先にやるのでいいと思います。

○委員 和綿プロジェクトも聞きたいなという気持ちもあるんですけども、今までの話の流れからいって、ちょっと性格が違ってくるかな。それが入っても、かえって混乱するかもしれないという危惧がありますので、今のお話のほうがいいかなと私は思います。

○議長 いかがですか。私が事務局とお話ししたのは、和綿プロジェクトが悪いとか、そういうことではなくて、参考にはなるでしょうけれども、今いらっしゃる皆さんも1回限りではなくて、何回もお話を伺ってきたということと、実際に何か行動するとなると、そこにも時間をかけたほうがいいのかということで、そちらを先に進めながらの方が……。

○委員 私も分かっていないんです。というのは、うちの学校がやっているのはあくまでも授業。でも、和綿プロジェクトがやっているのは、うちの学校だけではなくて、ほかの学校さんともやっているんですね。私立学校さんとかともやっているし、もっと広い活動のようなんです。なので、よく聞いてからでないと、それこそちょっとタイプが違う連携

の形かもしれないなと思います。だから、それでいいと思います。

○議長 ありがとうございます。では、そういうお話を今、聞かせていただいたので、次回は資料2で言う8回と7回を取りあえず入れ替える感じで、次回の3月は来年度の5月、6月に向けた連携・協働で何ができるかという話をもう少し詰めていきたいなと思っております。よろしゅうございましょうか。

では、次回の予定を決めましたので、日程調整をしなければいけないんですね。

○事務局 はい。

○議長 じゃ、事務局、お願いします。

○事務局 事務局から3月の予定について調整させていただいたんですが、実は半数の方からしか御回答をいただけていないんです。5人の方からいただいた日程でいきますと、3月6日（月）、9日（木）、13日（月）の3日間は大丈夫といただいていますので、残りの半数の方が6日、9日、13日のどれでも大丈夫ということであれば、この3日間の中から会場が空いているところを押さえさせていただこうと考えてございます。いかがでしょうか。

（ 日程調整 ）

○事務局 では、皆さん、よろしければ、6日（月）か、9日（木）でこちらの会場が空いているほうということで、場合によってはこの会場ではない場所もあり得るということだけは御承知おきいただければと思います。よろしくお願いします。

○議長 あと、今日御欠席の委員の方の御都合も少し伺ってください。

○委員 じゃ、一応13日はないということでいいですか。

○事務局 はい。

○委員 6日か、9日ということで。

○事務局 はい、どちらかで。

○議長 ありがとうございます。ほぼ時間となりましたが、いかがでしょうか。

特になければ、これで終わりたいと思います。皆さん、ありがとうございました。